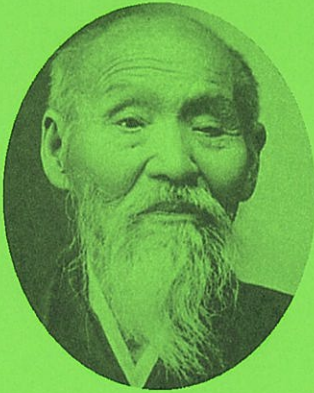


高峰山

曾我五郎十郎翁頭彰誌



やさか観光協会



曾我五郎十郎翁顕彰誌発刊にあたり

やさか観光協会会長 吉村俊廣

旧坂下町（現中津川市坂下）は面積二九キロ平方メートル、人口六千人と小さな町でしたが、教育面では、保育園から高等学校まで、医療・福祉施設においては総合病院、老人保健施設、デーサービスセンターまであり、上下水道においても近隣町村に先駆け整備されておりました。

その理由は、昭和時代の公共施設整備の財源として、町有林・高峰山から産出される良質な木材が大きく貢献してきたことによります。

この高峰山は、明治四年の廃藩置県の時、苗木藩から私財をはたいて払い下げを受け、植林など八年間手入れを行った後、坂下に寄付をされた「曾我五郎十郎翁」の業績であり、現在も坂下地区区長会により翁の顕彰祭を開催していただいておりますが、時代とともに翁の業績は一般の市民からは忘れさられようとしていきました。

最近になり、埼玉県で古書店を営む土井秀夫氏がこの曾我五郎十郎翁に大変関心を持たれ約十年に渡り調査されている事を伺い、翁本人はもとより子孫の方と坂下町の関わりについて、ひとつの物語にまとめていただきました。

また、翁のご子孫にあたる曾我晴夫氏からは、戦後の曾我家と坂下町の思い出について語っていただきました。

ここに翁の業績を長く後世に伝えるため、これを製本し会員をはじめ関係者のみなさまに配布させていただく事としました。

平成二十六年十月吉日



目次

顕彰誌発刊にあたり

吉村俊廣
… 1

高峰山

曾我五郎十郎翁と美濃坂下町

土井秀夫
… 7

曾我照代の思い出

曾我晴夫
… 53



大正末頃の坂下付近



曾我家明治四十一年（後列右が照代さん）

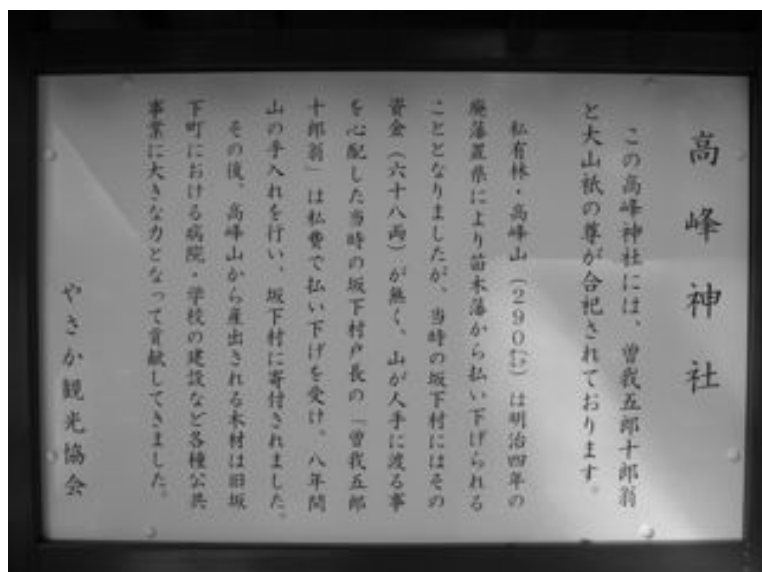


曾我家庭園（左富三郎氏と祐一氏）

曾我五郎十郎翁頌徳碑、高峰神社



高峰神社看板



高峰山

土井秀夫

その一

木曾谷は夏冷涼にして冬寒く、その厳しい風土は山々に多くの良木を育んできた。なかでも檜は建築材として最も良質とされ、古より寺社仏閣、城郭等様々な建築に利用されてきた。木曾谷を直轄領とした豊臣秀吉はその銘木を使って聚楽第や伏見城を築いている。秀吉没後、関ヶ原、大阪の役、江戸開府と、戦乱や復興が続き、木曾の山林は乱伐され荒廃した。

江戸時代初頭に木曾谷を領有した尾張藩は、山林保護のため巢山、留山を設け、御用材以外は檜の伐採を禁じ村人の入山を制限した。しかし、誤伐、盗伐は止まず、後には檜に似た翌檜、榎、高野槇、杜松も伐採を禁じ停止木とした。これを木曾五木という。木曾谷の多くの山々は明山として村人に開かれていたが、暮らしに必要な雑木や下草を刈る事のみが許され、停止木の伐採は禁じられた。盗伐すれば死罪などの厳罰に処せられ、「木一本、首一つ」と巷間に囁かれた。人々は山に囲まれながら、その山を自由に利用する事が出来なかった。

苗木藩領坂下村は木曾谷の南端、美濃高峰山の北麓にあった。村の中央には裏木曾の山々を源にする川上川が流れ、村外れで木曾川に合していた。人々はその川上川と木曾

川の河岸段丘に集落を作り、田畑を耕作して暮らしていた。

坂下村の庄屋、曾我五郎十郎は苗木藩庁からの帰途、夕闇迫る高峰山麓の峠道を歩んでいた。周囲の森は藩有林である。森は乱伐され草地が目立ち、無残に荒れていた。

もとより、苗木藩は山がちの地勢であり林業に力を入れていた。しかし、幕末に至り藩の財政が逼迫し、山林の整備まで手が回らなくなったのである。苗木藩の財政悪化は幕藩体制の構造的な問題に起因していたが、十四代藩主遠山友禄の二度に亘る若年寄勤役による出費が、また大きく影響していた。

領内の庄屋が藩主の別荘に招待されたのは、つい先年の明治元年の事である。その日、藩の重役や財政担当役のみならず、藩主自ら一同に目通りを許し、藩の窮状を訴えたのであった。維新政府へ挨拶の為の上京費用捻出が目的であった。翌月には質素儉約の範を示すため、藩主自ら城を出て山中のその別荘にて暮らし始めている。

そして、今日再び領内の庄屋が藩庁に呼び出されたのであった。財政改革の為に高峰山を始めとする藩有林の払下げを受けるようにという要請であった。

五郎十郎は峠に差し掛かると歩みを止めた。坂下村まではもう幾許もない。山峡にある坂下は耕地が少なく、近隣の土岐や瀬戸の窯に薪を売って生計を立てている者も多い。

山は村人にとって日々の暮らしに必要であり、生きていく為の糧を得る場であった。

五郎十郎は樹間の彼方に黄昏ゆく坂下の集落をしばし眺めていた。

「この山を余所者に渡してはならぬのう」

五郎十郎は自らに言い聞かせるよう呟くと峠道を下り始めた。

翌日、五郎十郎は組頭など村の役方達を屋敷に呼び集めた。彼等は五郎十郎より皆年配者である。五郎十郎は表座敷に寄合う村役達に昨日の藩庁での話を伝えた。

「此度の藩有林払下げにつきましては、ご承知の方も居られると思いますが、昨日、正式に藩庁からこの村に高峰山払下げのお話がございました」

村役達は皆押し黙っている。腕組し目を閉じている者もいた。

「村の目の前にあるこの高峰山はいわば村の山、是非にも必要な山と思われます。村として購いたいと思いますが、如何なものでございましょう」

村役達は相変わらず無表情である。

「払下げをお受けしなければ、後々悔いを残す事となりましよう」

しばらく沈黙が続いた後、一番年配の役方がようやく口を開いた。

「そうは言ってもわし等は薪を拾うくらいでの中。そんな山に何十両もの金はとても出

せぬ」

その役方はさらに言葉を続けた。

「若旦那、若旦那が伊那からこの坂下へ来てもう十年余りになりますかのう。申し上げるまでもないが、あの高峰の山は先祖代々この村の者なれば自由に入れる山ですがのう。今更それを購うなどと言つても」

「これからどのような世の中になるのか判りませぬ故、高峰のお山をこの村のものとして、確かなものにしておきたいのです。もし他所の村のもの、あるいは新政府の山となれば、果たして今までのようにまいりますでしょうか。もし立ち入る事が難しくなりましたら、その時は如何されますか」

「そうは言つてもものう」

「あのお山は必ず村の為になりましょう。この坂下は山の中、ご領内の他村より多少田地は多いかと思ひますが、この狭い地をいくら耕しても限りがございます。山に暮らす者は山に糧を求めるのが天の理と思ひますが」

「若旦那の話は分らないがのう」

役方は一呼吸置いた。

「何と言っても井織屋はこの美濃でも指折りのお大尽だ。金の心配はないかも知れん。だが、わし等含め他の衆はのう……」

「今一時ばかりはいささか費用も掛かりましようが、木を植え、山を育てれば五十年後、いや百年後には必ずこの村の役に立つ時が来ると思います。我等が孫子の代には、この坂下はきつと豊かな村になる事でしょう」

「そうは言ってもものう、わし等は今日の飯の事を心配しなければならぬのう、とても無理な相談だ」

村人にとつて山はそこにあるものであり、先祖代々その山の下草や雑木を刈つて暮らしてきたのである。その山が藩有林であろうとなかろうと、これまで自由に入る事の出来た山である。今更大金を投じて購入する必要があると思えなかつた。まして五郎十郎が説く五十年先百年先の山の事など、日々の暮らしにはまったく関係のない事であつた。

曾我家は五郎十郎で十六代目となる東美濃でも屈指の豪農である。屋号は井織屋、代々酒造業も営み、村の中心地に壮大な屋敷を構えていた。

五郎十郎は天保二年生まれ、信州伊那の名門片桐家の出である。幼少時よりその利発

さが近郷に知られ、男子に恵まれなかつた井織屋の先代がその噂を伝え聞き、五郎十郎二十歳の時に請うて婿養子に迎えたのであつた。

五郎十郎が大平峠を越えてから既に十数年経ていたが、家督を継いだのはつい先年の事である。年長の村役達を前に無理押しは出来なかつた。

五郎十郎は村役達が引き上げると先代に次第を報告した。病がちとなつた先代は隠居後、寄合いに出る事はおろか、坂下三郷に渡る小作人の管理、酒造蔵の差配、使用人への指図、家業全般一切口出しする事を控えていた。

「親父様。お加減は如何でございますか」

五郎十郎は奥座敷に臥せている先代の傍に座つた。先代は五郎十郎に助けられながらゆっくり身を起こした。

「今日はかなり良いようじゃ」

「お山払い下げの話、村人には難しいようでございます。このままでは高峰のお山、他村のものになるうかと。あるいは新政府のものになるかも知れませぬ」

「いかにもそうだのう」

「私の説き方が足りぬ故、村人の賛意を得られぬのでございましょうか」

「いや、村の衆の反対するのは、そういう事ではないと思うがのう」

「未だ私は余所者のようでございます」

「いや、そうではあるまい。だがのう、村の衆には少しばかり荷が重いかも知れぬ」

先代は五郎十郎の肩を借り、縁に出て腰掛けた。

庭先の畑には蕎麦の白い花が風に揺れている。

「村で購うことが難しければ――」

「五郎十、おんしは曾我の当主ではないか、おんしが決めれば良い事じゃ」

「お山を買うだけではなく、植林もするとなるとどれ程掛かりますか。地租もかなりの額になるうかと」

「高峰のお山はこの村の山。五郎十。おんしの心はよう解っておる。おんしの好きにするが良い」

「目の前の山が他所の手に渡れば村人が難儀する事になりましょう」

「なればこそ、坂下の曾我は、井織屋は、名前程の事もないものと言われよう。井織屋あるのもこの村あればこそ。村の者に負担は掛けられまい。五郎十、御用金続き故苦しかろうが、おんしの言うように必ず村の役に立つ時が来るに違いない。使う時使わず

して何の為の金であろう。井織屋の身代賭けてもやるが良い」

「有難く存じます」

五郎十郎は先代の前に跪き深々と頭を下げた。

明治四年、廢藩置県となり庄屋から戸長と役名を変えた曾我五郎十郎は、高峰山を中心とする旧藩有林三百六十五町を私費六十八両にて購入した。

五郎十郎はさっそく荒れた山に手を入れ植林を開始した。坂下の村が望める見通しの良い地に作業小屋を建て、その小屋で寝泊りする日々が続いた。植林の指示、進捗状況を監督するだけでなく、五郎十郎自ら率先して苗を植えていった。高峰山のなだらかな斜面は檜の苗に少しずつ覆われていった。

川上川上流の裏木曾の村々や、木曾川を挟んだ坂下村の対岸は尾張徳川領である。その山の殆どは尾張藩の藩有林であり、厳しい管理下に置かれていた為良木が多かった。

維新により、山林がやつと自分たちに帰ってくる、新しい時代が来る、と木曾の人々は新政府に期待をしていた。享保以前の山に、自由林に戻したいと望んでいたものであつ

た。平田篤胤の門に学び、復古的な理想主義者であった馬籠宿本陣の当主は、山林開放を図るべく東奔西走した。しかし、財政難に苦しんでいた新政府が木曾の美林を手放す筈も無く、新政府に嘆願書を提出する直前、当主は戸長を免職となり鬭争は挫折した。尾張藩の藩有林は官有化され、旧藩時代以上に厳しい管理下に置かれる事となった。それまで村人に開かれていた明山さえも、雑木や下草を刈るどころか入山する事さえ困難になってしまったのである。

維新は山に暮らす人々を裏切り、山に暮らしながら、山の恵みを受ける事さえ難しい生活を強いることとなった。木曾の夜は未だ明けなかった。

【明治十二年、坂下村役場】

昼食を摂り終えた曾我五郎十郎は村長室の窓から外を眺めていた。茶を入れていた書机も手を休めると五郎十郎の背越しに外を見た。久しぶりに雨の上がった梅雨の中休み、高峰山が緑濃く横たわっている。

「村長、今日は山が良く見えます。高峰のお山も見違えるようになりました。檜もすっかり根付いたようで」

「みな村の衆の力じや」

「村長、なんでまた山を村に寄贈するなどと。大金を使って手に入れた山ですのに」
五郎十郎は笑いながら席に戻り、窓際に立つ若い書記に尋ねた。

「おんし、ひとつ尋ねるが川は誰のものかのう」

「ううん。川で暮している者達のものですか、いやどうだろう」

「山はどうかのう」

「それはその山をもつとる方のものと違いますか」

「私はそう思わん。山や川は、いわば天からの預かりものではないかのう。私らは束の間それを借りているに過ぎないと思うがのう」

「はあ、そんなものでしょうか」

「もともと山や川は個人のものかのう。私らはそこにしばしの間暮らし、その恵みを頂戴しているに過ぎないのではないか。山や川を慈しみ、愛し、育てる者が、ほんの束の間、借りる事が出来るものじゃないかのう」

五郎十郎は再び窓際に寄って書記と並び、山に向かった。高峰山の空に白い雲が浮かんでいる。もう夏の雲であった。

「天が我々にほんのひととき貸して下さったものではないかのう……。この山は天から預かった村の宝物。そういうものを個人のものとして良いものか」

「しかし、村長、そうは言っても」

「いや、個人でもつとるものはいつか必ず無くなる時が来るものじゃ。村のものであれば、この村ある限り、高峰山はこの村の宝になるのではないかのう」

私費を投じて高峰山藩有林の払下げを受けてから八年後、曾我五郎十郎は、植林事業が一段落したところで、その高峰山の檜林をすべて村に寄贈した。

その二

【昭和二十八年秋、東京】

その日、東京では今年初めての木枯らしが吹いていた。神田川沿いの軌道を路面電車がゆっくりと進んで来る。軋む音。停車場にゆっくりと電車が止まった。

降車した客は和服姿の老婦人だけであった。風呂敷包みを大事そうに抱えたその老婦人は、停車場から続く人通りの少ない商店街を、時折左右に視線を送りながら歩いて行った。まもなく大学の正門前にある講堂の時計台の下に出た。正門から望む構内には角帽を被った学生がちらほらと見受けられるだけで人影は少ない。はるか奥には大学創立者の銅像も見える。

老婦人は正門に程近い一軒の古本屋の前で立ち止まった。入るかどうか躊躇しているようであった。木枯らしが背中を吹き抜けていく。

その古本屋の店内は古い柱時計の音だけが妙に大きかった。火鉢の薬缶の湯気。古本の棚。通路には疲れた本が棚から溢れ出たように積んである。初老の店主が帳場に座って本を読んでいた。

ふと、人影が映ったような気がして、店主は眼鏡をずらして戸口の方を見た。ガラス戸の向こうに夕暮れの空が見え、色づき始めた銀杏の梢が大きく揺れている。

「寒いわけだ」

店主は店を閉めようと帳場から降り戸口に向かった。カーテンを引こうとした時、誰か外に居るのに気が付いた。

「何か御用ですか」

戸を少し引いて店主は尋ねた。そこには老婦人が思いつめたような様子で立っていた。

「ええ」

少し間があった。

「本を見ていただきたいのですが」

そう言いながら老婦人は提げていた風呂敷包みを両手で差し出した。

「外は寒い、さあ中へお入りなさい」

店主は大きく戸を引いた。

帳場に腰を下ろした店主がお茶を勧めると、老婦人は小さく頷き火鉢の脇に腰を掛けた。老婦人の着物は大正時代に流行した縞銘仙であろうか。着古されてはいたが良く手入れされていた。

「たくさんの本でございますね」

天井まで積み上げられた本の山。柱時計の時を刻む音。風の音は聞こえない。

「そうね、商売だから。うっかりするとすな、寝床まで占領されかねません」

帳場の奥の縦額障子の向こうは店主の万年床なのであろうか。蒲団の脇までやはり本の山であった。

「内容の無い、つまらぬ本は捨てているのですがね」

「捨てるのですか」

「そうしないとすぐに本で溢れてしまうのですよ。もつとも、この様では溢れているようなものですが」

「どのお店も同じでございませうか」

「おそらくそうでしょう。でも古本屋にとってのお客は今この時だけではないので、五年、十年先、あるいはそれ以上先のお客の為に残す本もあるのです。その本を必要とする人がいつか現れるのではないかと、経験と直感で判断するのです。独断と偏見と言う者も仲間には居りますが」

「十年以上も、気の長いお話でございませうね」

「ただ、店主の好みがありますからな。どの本もという訳ではありません。それぞれ

の店にそれぞれの本、棚の顔というものがありませんか。どの店も似ているようで違うものです」

「棚の顔ですか」

「こう言い換えても良いかもしれませんが。それらの本は待っているのですよ、こうして棚に並んでね。いつか自分を探しに来てくれる人を」

老婦人は風呂敷を解いて机上に拡げた。中から現れたのは数冊の古そうな本であった。一番上の本の表紙には『若菜集』と表題が書かれている。老婦人はその本を入手した経緯や何故手放すのか、身の上を少しづつ語り始めた。

ええ、嫁ぎ先の義祖父も本が好きで沢山持っておりました。徳川様の時代には美濃苗木藩の庄屋で、はい、ご領内でもかなり大きな坂下という村の庄屋でございました。維新後は初代の村長だったようでございます。

私の生まれは馬籠宿、はい、藤村先生の木曾馬籠宿でございます。実家はその昔脇本陣でございます。

私が嫁いだのは、そう露西亞と戦争をしていた頃でございます。嫁入りの時は和宮様

以来の花嫁道中とか言われましたが、いやいやそうたいしたものではございません。馬の背に揺られて峠道を下り、木曾川にはその頃まだ橋もございませんでしたので、渡し舟で坂下に入りました。舟を降りますと花火が揚がり、村中で歓迎をしてくれました。

———曾我五郎十郎の長屋門の前には村の人々が集まり、花嫁行列を見ている。空は青く澄み渡り花火が何発も揚がる。長屋門に入っていく行列。玄関で出迎える曾我五郎十郎家の人々。その中央に五郎十郎翁の姿。

三日三晩披露宴が続きました、はい、夫は曾我祐一という普通の名前でございますが、義祖父は五郎十郎という少し変わった名前でございます。もうかなりの齢でございますが、まだ矍鑠としておりました。義父は富三郎と申しまして、酒造業を営みながら、義祖父の銀行も経営しておりました。私でございますか、私は照代と申します。

帝国名誉録という本でございますか。はあ、明治時代の紳士録のようなもの、そのような本があるのでございますか。いえ、わざわざ調べていただかなくても結構でございます。

坂下というところは田畑が少なく、その頃は山の仕事か、養蚕をしている者が多かったように思います。蚕はお金になるまで時間の掛かるものでございます。それで種を買う農民にお金を。ええ、それまでは高利貸しから借りて、随分酷い目にあつた農民もいたように聞いております。義祖父が銀行を始めてからは村人に喜ばれたようで。

えっ、義父の富三郎が載っておりますか。明治二十三年の本に。そうでございますか。載っておりますか。

秋の取り入れ時期になりますと、長屋門の前には米俵を満載した荷車が列をなして、三日に分けて蔵入れをする程で、使用人も何人居りましたか。

坂下が大きく変わりましたのは鉄道が開かれてからでございます。そう嫁いだから二、三年後の事ですが。一面沼田であつた所に駅を作りまして、あつという間に駅前には賑やかになりました。

川で流しておりました木材は、汽車で運ぶようになり、野麦峠を越えて諏訪へ入つていた飛驒の女工さん達も、坂下まで来て汽車で諏訪に向かうようになりました。また、坂下から飛驒に通う行商人も増え飛驒からの荷物も集まり、義祖父の銀行も忙しそうで、本当に良い時代でございました。

村の鎮守に義祖父の頌徳碑が建てられましたのも、確かその頃の事でございます。

「あの様なものは村にとつて何の役にも立たん。時が経てば、せいぜい子供の隠れ鬼に使われるだけではないかのう。明治の初め頃、山を少しばかり村に寄贈した事があるだけだ」

と義祖父は申しまして、喜んでいるようには見えませんでした。

———蒸気機関車の止まっている坂下駅。駅前には多くの女工達が群れている。荷車や商人が行き交う往来。商店。旅籠。活気のある駅前である。少し離れた構内には積み上げられた木材。駅の近くに西洋風建築の坂下銀行がある。

それからまもなくの事でございます。禍福は糾える縄の如しとか申しますが、良い事はそう続かないもので、その義祖父の銀行が潰れてしまったのでございます。ええ、重役の横領が原因と聞いておりますが、詳しい事はわかりません。噂とは怖いものがございます。すぐ取付け騒ぎになりました。

田地田畑や山林を始め家作など、義祖父は持っている限りの財産を弁済に充てるよう

義父に命じたのでございます。義父は屋敷まで売立てる事に反対しておりましたが。

「村の衆に迷惑は掛けられぬ」

と義祖父は申しまして、結局すべて手放したのでございます。

しかし、それでもかなりの借財が残りました。それまで義祖父が往来を行く時など、頭を下げて道を譲っておりました村人達が、銀行に押しかけて来た時は、義祖父に殴りかからんばかりでございました。怒る村人達の前で義祖父は土下座して謝罪をしておりました。

はい、住むところもなくなり、その昔、義祖父が建てたという植林の作業小屋が、村の山の中に朽ち果てながらも残っておりまして、しばらくはそこに居りました。

雨が降るとあちらこちらで雨漏りするような粗末な小屋でございました。債権者達が何度も小屋まで押しかけてまいりましたが、どうしようもございません。檻樓の中で病んでいる義祖父に、罵声を残して引き上げていきました。

それでも、昔の使用人などが時折訪ねて来て何かと世話をしてくれて、その日その日を何とか暮らして居りました。

どのくらいそこに居りましたか。ええ、義父母は名古屋の方に金策に出たまま、まもなく音信がなくなりまして。はい、その後の行方は分かりません。

「結局わしはこの村に迷惑を掛けただけの余所者であった。村の衆に本当に済まぬことをした」

と義祖父は毎日嘆いておりました。

「墓などはいらんが、せめてこの村の土になれぬものかのう」

と言ひ残してまもなく亡くなったのでございます。

美濃でも指折りのお大尽と言われた義祖父でございましたが、野辺の送りに人も無く、それはもう寂しいお弔いでございます。ご先祖様の立派な墓石の脇に小さな墓を建てるのが精一杯ございました。

義祖父を送つてまもなく私と夫は上京したのでございます。まだ暗い峠道を中津川まで歩きました。坂下の駅に出て誰かに見られてはいけないと思ひまして。

東京に嫁いでいる妹を頼つて上京したものの、そう簡単に仕事なぞ見つかるものではないでございます。仕事を求めてあちらこちらを転々いたしました。

数年後、ようやく妹の住む下谷の方に落ち着き先が決まったと思つたのも東の間、あの震災でございます。命からがら夫と逃げ回りました。本当に良く助かつたと思うのでございます。

ええ、持ち出すものと言つても、貧乏暮らしですからたいした物はございません。私の宝物は、嫁入りした時に、義祖父から譲り受けたこの本ばかりでございました。

震災後、縁があつて柴又の方に移りました。はい、帝釈天のある柴又でございます。今もそこに住んでおります。

世の中はだんだん不景気になり、大学を出ても職に就けない者がいたような時代でございます。妹の世話で細々と針仕事などをし、夫は代書屋のような事を始めましたが、それはもう人様には言えない本当に貧しいその日暮しでございました。

それでも、娘を何とか女学校まで上げる事が出来たのでございます。何より学問が大事だというのが夫の口癖で。その辺りから女学校へ通う者は初めてだと、近所では評判でございました。

大東亜戦争が始まった頃、夫は軍需工場に職を見つけ、事情も多少良くなったのでございますが、やがて身体を悪くしまして床に臥せている日が多くなりました。

ご存知のようにだんだんと物が無くなり、配給も滞りがちになり、仕舞いには、その日食べるものにも事欠くようになりまして。また、娘の方は学校で勉強どころか、勤労働員とかで国技館で袋張りのような事をしておりましたそう。

そこへ三月、昭和二十年の三月でございます。それはひどい空襲で。夫は病院に入っておりましたが、逃げ出す事もままならなかったようで、その晩限りの命でございます。

そして、その娘も戦争が終わってまもなく、女学校を卒えて安堵したのも束の間、熱を出したと思えば、医者に見せる間もなく一晩で亡くなってしまったのでございます。

私はもうこの世に生きていない意味もないように思え、身投げしようと思いましたが、やはり戦争で一人暮らしになってしまった妹を更に悲しませる訳にもいかず、今日まで何とか生きて参りました。

先日、その妹を訪ねましたところ、活動写真に木曾の実家が写っているという話を聞いたのでございます。はい、藤村先生の「夜明け前」という活動でございます。話だけ

ではもどかしく、懐かしさもあり、私もさつそくキネマに出かけました。

そうしましたら、まあ、木曾の山やら谷やら、宿場も昔のまままで。実家が写り、恵那の山が写り、もう泣けて泣けて。

二度と故郷の土を踏む事はあるまいと思っておりますが、その活動を見ましたら、もう堪らなくなりました。死ぬ前に、一度でいい、嫁ぎ先のご先祖様の墓参りに行こう、いや、行かねばなるまいと思いました。

今日また妹の所に立ち寄り、故郷に帰ることを告げてまいったのでございます。

妹は反対しておりました。妹が心配するのも、もつともな事でございます。もう坂下には身寄りどころか、知人さえおりません。

まして、夜逃げ同然で出て来た故郷でございます。そんな所へ帰ったところで、良い事などある訳がないと妹は申すのでございます。零落れた姿を今更晒す事はないと、そう申すのでございます。

しかし、何としても一度帰って墓参りをしようと思つて決めました。もう曾我の家で生き残っているのは、嫁の私だけになってしまいました。

たった一人この世に残された私が墓参りに行かなければ、いったい誰がご先祖様にお

線香を供えるというのでございましょう。もともと、墓のある山も人手に渡りましたので、その墓さえどのようになっていくのか分かりませぬが。

今行かなければ、もう二度と機会はないと思うのでございます。義祖父が愛した坂下を、故郷の山を、一目だけでも見たいのでございます。

この本がどれ程価値のあるものか分かりませぬが、老い先短い私がこのまま持っていたところで仕方がございませぬ。せめて故郷までの汽車賃にならぬものと、恥を忍んでまいったのでございます。

その三

山峡を行く蒸気機関車。深い谷。檜の山。木曾路に入るともう奥山は見えない。美しい河床を間近に見ながら汽車は走る。谷間に響く汽笛。窓外に流れる景色が少しずつ見覚えのある景色に変わっていく。

———おじい様、今日帰りますよ。四十年ぶりに坂下へ帰りますよ。

汽車はゆつくりと坂下の町に入って行く。前方左手に恵那山が遠く見え、やがて高峰山が顔を出すと坂下駅である。構内には木材が山のように積み上げられている。

小春日和の穏やかな日であった。四十年ぶりの坂下はすっかり変わっていた。駅前商店街、大きな建物が幾つもある。とても同じ町とは思えなかった。照代は賑やかな町中を避け、裏道伝いに町外れの丘にある墓地へ足早に向かった。

曾我家代々の墓は以前と同じように森の中にひっそりと並んでいた。十坪程の墓地ではあるが、草は刈られ植栽も良く手入れがされており、まるで今日誰かが掃除をしたように清潔であった。

———誰か墓参りに来た者がいる。いったい誰だろう。

照代は訝しがりながら、代々の墓の前に香を供えた。義祖父の小さな墓の前まで来ると、跪き眼を瞑ってじつと手を合わせた。静かな風が時折落葉を運んでくる。百舌の高鳴。故郷の秋であった。

鎮守の杜、坂下神社は墓地から近かった。その境内の南面に日露戦争の忠魂碑と並ん

で、義祖父五郎十郎の頌徳碑は建っていた。周りに石垣が組まれ綺麗に整備されている。境内には多勢の子供たちが歓声をあげて走り回っていた。

境内からは坂下の町が望めた。義祖父はこの場所から町を見渡すのが日課であった。義祖父は幾つもの炊煙が上がる夕方の風景が好きで、照代も何度か一緒に眺めた事があった。そして照代の坂下の風景はその時のまま止まっていた。

屋敷があったのはどの辺りであろうか。町並みがすっかり変わり判然としなかった。これが四十年の歳月か。照代は陽の傾きかけた坂下の町を悄然と眺めていた。

「もし、そこに居るお前様は曾我家所縁の方かろう」

照代はその声を聞いて振り向いた。目の前に自分より年配の老人が杖を付いて立っていた。

「今しがた、五郎十様の墓に居られましたのう」

「……ああ何ていうことだ。四十年も経とうというのに、まだ借金取りがいたのか。やはり妹の言うことを聞いていれば良かった。こんな零落れた姿を見せて恥を晒してしま

照代は眼を伏せて、その場を立ち去ろうとした。

「ひょっとして、お前様は井織屋の照代様ではないですかのう」

その声を背にして照代は観念した。

「いかにも私は曾我照代でございます」

「おお、やはり五郎十様の所の照代様か」

「申し訳ございません。もう逃げも隠れもいたしません」

照代は跪き手を付いた。

「残り少ない命ではございますが、一生懸命働いて、祖父の借財を少しでもお返し申し上げます」

照代の声は震えていた。

老人は一瞬怪訝な顔をしたが、すぐに杖を傍らに置くと膝を折って照代の手を取った。

「何を申されます。五郎十様に何で借財などありません。照代様、さあ、面を上げてお立ちください。わし等はずっとお前様を探しておりました」

「どういうことでございませうか」

照代には何の事か分からなかった。

「ずっと、ずっと待つておりましたがのう、お前様がいつか来られるのではないかと」「いったい何の話でございましょう」

老人はゆっくり頷いて照代の手を引いた。

「どこから話をしましょうかのう」

老人は五郎十郎の頌徳碑の前の石垣に照代と並んで腰を掛けた。

それは随分と苦勞されましたのう。それで、今は一人で暮らしていなさるのか。成程、それではその活動を見て、照代様は墓参りに来られたのですか。

わしは昨日の事のように良く覚えておりますがのう。照代様が馬籠から嫁入りに来られた時の事を。本当にお綺麗で。あの時はお屋敷の前で、お前様の通るのをずっと待つておりました。

五郎十様程坂下を愛している方はおりませんでした。村の為に、村の為にいつも言われておりましたのう。

家業がいけなくなつてお屋敷まで手放されたというのに、わしらはただ見ているだけで、五郎十様に助けられた者も沢山居りましたがのう。五郎十様の寢所まで取立てに行

つた者も居ったそうで。今思えば、本当に申し訳ない事でございましたのう。

町ではここ数年、水害に遭ったり、学校を建てたり、病院を建てたり色々金が掛かることが続きましたな、その度毎に五郎十様のお世話になりました。

いや、そんな不思議な事ではないですがのう。わしのような年寄は皆知っております、五郎十様のお陰で町が豊かになったという事を。と言うのも、この戦争が終わった後、高峰山の檜が飛ぶように売れ始めましたのう。そうそう、坂下新聞、町の広報誌じゃが、これに去年正月に載った投稿が始まりでしたのう。「町長、町民に告ぐ」という題でしたかな。

「高峰山の檜が高く売れたと騒いでいるが、いったいどなた様のお陰だ。町民は皆恥知らず、恩知らずだ。それは明治維新の折、村の衆が反対するなか、曾我五郎十郎様が私財を投げ打って買われた山の檜ではないのか。五郎十郎様は無欲な方で、それを村に寄付されたからこそ今日があるのではないのか。その恩義を忘れ、五郎十郎様にわしらはどれ程酷い仕打ちをした事か」

そんな内容でしたかのう。それまで町の者達は皆浮かれておりました。若い者は殆どそのような事情を知らぬでのう。だがその投稿が坂下新聞に載って以来、町は変わり

ました。五郎十様の威徳を偲ぶ声があちらこちらで起きましてのう。

それでのう、五郎十様の恩に報いる為になにか出来ないかと、町長や議員を始め、わし等年寄が寄合いましてな、とにかく、遺族の方を探し出そうという事になったのですがのう。

さっそく名古屋や東京に人を送って、心当たりを探しましたがのう、分かりませんでした。それでしたか、馬籠の実家にも住所を知らせておりませんでしたか。それでは幾ら訊ねても教えてもらえなかった訳ですのう。

結局、待つことにしたのでのう。もしかしたら、五郎十様の命日に、どなたか墓参りに来られるのではないかと。それで毎月の命日には皆で墓の掃除をしましてのう、もう一年以上前から、ずっとずっと待っております。

あれを見なされ、町の向こうに見えるあの山を。高峰山ですのう。立派な檜の山になりましたがのう。明治維新の折、この坂下の五十年先百年先の為に、五郎十様を買われた高峰山ですのう。

照代様、一人暮らしでは何かとご不便な事もございましょう。宜しければ坂下に戻つ

て来られてはどうですかのう。東京の暮らしに慣れた照代様には田舎暮らしは少しばかりつらいかも知れませぬが、照代様がこの坂下に住む事に、歓迎こそすれ異存のある者は誰もおりませぬでう。

その四

昭和二十九年四月、坂下町議会は吉村町長他二十二人の町議会議員全会一致で、曾我照代さんに曾我家屋敷跡の一角に住宅を建て提供し、終身年金を贈る事を議決した。

【町議会議決文】

第一条 本町に宇高峰山及松山町有林を寄贈された故曾我五郎十郎氏の威徳を顕彰しその功勞に報ゆる為、遺族曾我照代氏に対し、終身年金を贈ると共に、住宅（宅地を含む）を建築してこれを贈与する。但し宅地及住宅は、当分の間町有として、本規定の定むるところにより管理する。

- 一、 年金 毎年度予算の定むる金額
- 一、 宅地並に住宅左記の通り

記

一、土地 坂下町大字坂下字宮ノ前一七五四番地の二

二、宅地 六六坪〇二合

三、建物 木造瓦葺平屋住家一棟建坪十六坪

第二条 本住宅の入居者は故曾我五郎十郎氏の遺族に限る。

第三条 本住宅の維持管理は、総て町に於てその責任を負い、公租公課及地代並に家

賃等は徴収しない。

付則 本規定は昭和二十九年九月一日から施行する。

その年の九月十一日、岐阜県武藤知事他多数の出席者の下、午前十一時より住宅の落成式が行われた。そして、その日の午後には役場二階の会場にて、住宅と年金の贈呈式が挙行され、吉村町長が式辞を述べた。

照代さんに贈られたその住宅は、かつて翁が植林し村に寄贈した高峰山の檜で建てら

れたものであり、また、その檜は町民一人一人の手によって伐り運ばれた檜であった。

【吉村町長式辞（抜粋）】昭和二十九年九月二十八日付坂下新聞より

坂下町民にとつて、永久に忘れる事の出来ない大恩人故曾我五郎十郎翁のご遺族を迎える為の住宅建築工事は、今春着工以来各位のご協力によつて着々進捗し、ここに見事に完成して本日その落成式を兼ねて贈呈式を挙げるに当たりご遺族曾我照代氏をはじめ親戚の皆様には遠路はるばる御出で下され、尚来賓として山林について深い関心を寄せられる岐阜県知事殿をはじめ多数のご臨席を得まして町民の皆さんと共に、かくも盛大に式典の挙行出来まことは、主催者にとつて誠に感激に堪えない次第であります。

―――廃藩置県の際、苗木藩領の山林開放について他村では村の有力者がこぞつて私有化を図つた中であつて、翁は苗木藩からその払い下げを受けるようにと依頼されたにも関わらず、これは個人の所有すべきもの非ず坂下村将来の財政的見地から永久に村有林として保有すべきものであると、時の村当局に村有林としての払い下げ方を勧奨されたのであります。

しかるにその当時の村の財政はこれを購入する力なく遂にこれを断念した為、翁は個人として百万金策に奔走し、当時の金子六拾八両を以つて高峰山、松山三百六十五町歩を購入の上、村へ寄贈を申し出られたのであります。

――終戦後に於ける坂下中学校や坂下警察署の建築、坂下小学校の改築や授産所、保育園の建築に――、坂下高等学校の新築――、坂下病院の大改造等、実に町經常費を数倍する大事業が実施出来つつありますことも一に帰して翁が残された町有山林の間伐材収入のお陰と申さねばなりません。

我々は常に建物の一つ一つが建築されるごとに、一般町民には或いは学校の生徒諸君にこの建物の一本の柱、一枚の板にも曾我翁をはじめ自分達の祖先の血が流れている事を教え、美林の下枝である一片の薪にも、感謝の誠をもつて取り扱うよう努めて来た次第であります。数年前町有林の中に高峰神社を祀り年々祭典と併せて、曾我翁の慰霊祭を挙行しておりますことも感謝の現われにはかなりません。

――我々町民としましては翁のご遺族のその日その日に思いをはせる時、孤独の生活ななされている夫人の老後を何とかしてお慰めしたいと考慮の結果、今回の計画となつたのであります。

……終わりに当り特に付言したい事は、町民各位にはこの機会に於いて翁の如き先覚の士に学び、愈々公共の事に励むの決意を新たにして頂きたいという事であります。

古人の言われたように、人間所詮は裸で生まれ裸で死すもの、お互いに目前一時損得に煩わされ、あくせくとして暮らすには余りにも尊い五十年の生涯であります。いずれの時代を問わず私欲に走る者多くして、公事に尽悴する者は暁天の星の様に少ないのに、万峯を眼下に雲表にそびえる富嶽の如く名利に超越して、遠い町の将来に思いを馳せられた翁の心を鑑とし、お互いに私心を捨てて大同団結し、町発展の為に努力する事を誓い合いたいと思います。これを以って本日の式辞と致します。

吉村町長の式辞の後、照代は目録を恭しく受け取った。顔を上げた照代の視線の先には、紅白の幔幕、窓外の秋空、そして、高峰山の穏やかな稜線。

ああ、高峰山が見える。

「おじい様、おじい様の愛した坂下は、おじい様の事を忘れておりませんでしたよ」

平成十七年二月、坂下町は島崎藤村の馬籠宿のある長野県山口村などとともに、中津

川市に編入された。

高峰山には古より育林と山仕事の安全を祈願する「山の神」が祀られていたが、戦後、曾我五郎十郎翁の威徳を称え、高峰山鎮野峠の町有林の中に「山の神」と一緒に高峰神社を祀り、町役職者、山林専門委員等の関係者が参列し毎年秋に祭典に併せ翁の慰霊祭を挙行してきた。

また、高峰山では毎年春に「町民みどりの祭り」として町民による植樹が行われ、昭和五十年頃より平成九年までの五月から六月にかけて、町内の小中学生が植樹あるいはたい肥や枝払いなどの手入れを山林専門委員の指導を受けながら行っていた。

しかし、歳月は流れ高峰神社祠は老朽化、また翁の頌徳碑の存在や功績も、年々坂下の人々の記憶から遠ざかりつつあった。

そこで、やさか観光協会、坂下区長会、中津川市が協議、坂下神社氏子総代等の協力を得て、高峰神社と頌徳碑を、年配の人でも参拝しやすい身近な地に移転する事にした。

平成二十三年、やさか観光協会は中山稻荷神社横に祠を建立、同時に頌徳碑の移設を行い、その年の顕彰祭に併せて遷座祭を行った。また、高峰山鎮野峠の高峰神社跡には中津川市が翁の顕彰看板を設置した。

幕末から明治維新にかけて山林経営が混乱する中、私財を投じて山林を保護・育成した人物は全国に少なくない。しかし、その威徳を顕彰しその恩に報いる為、その子孫を探し出し住宅や年金を支給した話はこの美濃坂下町以外聞かない。

了

曾我五郎十郎翁と美濃坂下町

私が曾我五郎十郎翁の名を初めて知ったのは、今から約十年前、平成十五年の秋の事で、高村五郎という新聞記者の書いた「秘話解禁」という一冊の本と出会った時でした。古本屋という職業柄、毎日多くの本に接しておりましたが、その日、棚の整理を終えて一息入れた時、たまたま帳場の机上にその本があったのです。

表題に惹かれ手にして頁を繰ると「夜明け前」という章があり、島崎藤村の小説と同じ題でしたので、どんな内容か興味が湧いて読み始めました。わずか十二頁程の短い文章でしたが、大変心を動かされました。

そのルポルタージュには、明治維新の折、私財を投じて町に貢献した恩人「曾我五郎十郎翁」の子孫を探し出し、その恩に報いた「坂下という町」の事が記載されておりました。

地図帳を開いてみますと、確かに岐阜県にあります。長野県境の木曾川沿いに、その町、坂下町。早速坂下町役場宛に、曾我五郎十郎に関連する資料があったら送って欲しいと連絡を入れたのです。間もなく総務企画課の方から十枚近い資料がファックスで送られてきました。それは坂下小史など翁の事績が掲載されている資料でした。

平成十八年の秋、所用の帰り坂下町を訪ねる時間が出来ました。坂下町は中津川市に編入されたと聞いておりましたので、まず中津川市の図書館を訪ねました。司書の方に坂下町の曾我五郎十郎翁の事績を調べたいと尋ねたのですが、翁を知る方が誰もおりませんでした。坂下町の公民館に図書室があるので、そこに資料があるかもしれないと告げられ、坂下町に向かいました。

坂下町を訪ねるのは初めてでしたが、町中の少し大きな建物はすぐに判りました。公民館の入口近くにいた数人の高校生に曾我五郎十郎という名を尋ねたところ、やはり知

っている者は誰もおりませんでした。

公民館の入り口の側に図書室がありました。室内には机と椅子があるだけで人の姿はなく、奥に書架が並んでいました。図書室には「坂下町史」があり、曾我五郎十郎翁の記載がありました。が、わずか二頁で頌徳碑の碑文が主な内容でした。それ以外書架には翁に関連ありそうな書籍が見当たりません。

側の棚に町の広報誌と思われる「坂下新聞」や「広報さかした」の綴りがありました。

翁の墓は何処にあるのだろう。屋敷跡はどのようになっているのだろう、そんな事を思いながら手掛かりを求めて更に頁を繰っておりますと、図書室脇の階段が急に賑やかになりました。年配の方々が多勢階段を降りて来られます。敬老会でもあったような雰囲気でした。

この方たちに尋ねれば、あるいは翁の事を詳しく教えて貰う事が出来るかもしれない。そう思うとすぐ席を立ち、たまたま階段を降りて来られた年配の男性に声を掛けました。その方が亀山先生でした。もちろん、その時はその方がどなたか知る由もありません。翁の墓を訪ねてみたいので場所を教えて欲しいと尋ねたところ、先生は驚かれた様子で、私が何処から来て、どうして翁の名を知っているのかと逆に問い掛けられました。坂下

町を訪ねたこれまでの経緯を説明しますと、詳しい者が居るから呼んであげようと、先生は傍らの公衆電話から連絡を取り始めたのです。

私は恐縮し、今日突然の訪問であり、後日改めて来町する旨申し上げたのですが、遠く埼玉から来てしかも五郎十郎翁の事を調べに来た人をそのまま帰す訳にはいかない、と先生は言われ、方々に確認を取られておりました。

先生のお話では、野村さんという郷土史を研究されている方が翁の事績に詳しいとの事でしたが、どうも連絡が取れないようでした。

電話を掛け終えた先生は外に私を導くと、小高い岡の杜を指差しました。そこは翁の頌徳碑のある坂下神社でした。先生にお礼を申し上げ神社に向かいました。

神社の境内で写真を撮っておりますと、町史編纂をされた方と、教育委員会の若い方が来られました。亀山先生が連絡を取られた方々のようで、まったく思い掛けない事になりました。ここまで親切に対応していただけるとは、本当にありがたく思いました。

翁の頌徳碑の前で、お二人から翁の事績について話を伺ったのですが、翁自身の文書は残されておらず、翁に関連する資料も少ないとの事でした。夕暮れが迫り、その日はそこで失礼する事にしました。

それから数日後、その野村さんから電話をいただきました。そして、公民館でお会いした方が、長く教職に就かれていた亀山先生という方である事や翁の事績、屋敷跡の事など色々お話を伺いました。しかし、電話では長話も出来ず、後日再訪した時にご教示いただく事をお願いしました。

その後、野村さんから翁の事績を題材にした漢詩の書が届きました。大変立派な書で、五郎十郎翁の名を巧みに取り入れて見事でした。(巻末掲載)

その翌年の秋、坂下町を再訪、ようやく野村さんにお会いすることが出来ました。翁の屋敷跡や墓地、そして、高峰山を見渡せる麓まで案内していただきました。

野村さんは翁の購入した檜林を示し、翁も偉かったがその子孫を探し出して恩に報いた当時の吉村町長もまた偉かった、と語られました。

以来、私はこの曾我五郎十郎翁の事績と、その恩に報いた戦後の坂下町を描き、少しでも多くの人に伝えたいと思うようになったのです。しかし、その時点で確認出来た資料は少なく、わずかに「坂下町史」「坂下小史」「顕彰碑の碑文」そして冒頭に挙げた「秘話解禁」だけでした。

その後も翁の資料集めを続けましたが「坂下新聞」などから幾つかの関係記事を手に

入れたに過ぎませんでした。

昭和二十六年九月十五日付の「坂下新聞」には、四人の老人が役場に集い昔話を語った記事が掲載されております。その中で古井乙吉さんが「個人の物ぢやいつ失くなるとも判らん」と翁が言つたと述べておられ、またその中には古谷権之助さんの名もありました。「秘話解禁」の文中にも名があり、曾我照代さんに出会つた老人と思われま

す。翁は明治十二年から同十四年まで県会議員を勤め、明治四十三年には頌徳碑が建てられました。そして、大正七年十月十日に八十八歳で亡くなられております。

曾我家没落後、翁が何処に住まわれたのか確認出来ませんでした。山中の小屋を設定したのは全くの創作です。

昭和二十七年三月十日付の坂下新聞の投書欄に、翁の娘の曾我とらさんがお茶・お花の教授をしておられ、昭和十七年に七十八歳で亡くなられた、との記述がありました。あるいは、この娘さんと一緒に住まわれていたのでしょうか。同じ文中に祐一（文中では祐一郎）氏の消息が不明な事、富三郎氏の弟の茂さんが中津に転住されて写真業を営まれていたが、昭和二十四年に亡くなられた事が記述されております。

現在、曾我家は照代さんの妹久代さんの孫にあたる晴夫さんが受け継いでおられます。

「秘話解禁」に記載のある「坂下銀行」は、その存在を確認出来ませんでした。ただ、昭和二十七年一月一日付の坂下新聞の「明治大正坂下風景」という特集記事中、明治から大正にかけて移り変わる町の様子の記述のなかに、翁の次男と同名の曾我茂さんが東美銀行支店で預金貸出を一人で行っていたとありました。何か関係があるかもしれませんが詳細は不明です。

昭和二十八年秋、照代さんの帰郷の契機となった映画「夜明け前」の概要を紹介いたします。この映画はその後ビデオ化され、今でも見る事が可能です。

映画【夜明け前】

昭和二十八年十月公開

監督 吉村公三郎

脚本 新藤兼人

原作 島崎藤村

出演 滝沢修 小夜福子 宇野重吉 細川ちか子 乙羽信子他

墓参時の照代さんは七十五歳、出会った古谷権之助爺さんは八十七歳でした。この年の十二月二十四日付の坂下新聞には、早くも町が曾我照代さんに住宅を贈る事になったとの記事が出ています。

住宅と年金の贈呈式における吉村町長の式辞は実際もつと長いのですが、核心部分のみを抜粋いたしました。吉村町長は、満州七星坂下村開拓団の人々が戦後帰還し困窮していた時に、自らの土地を提供し助けたと伺っております。

歳月が流れても恩を忘れぬ坂下の人たちと、その町民の声に応え翁の遺族を捜し出そうと決意したこの吉村町長が居られなければ、曾我照代さんも東京下町の一隅で不遇のうち生涯を終えていたかもしれません。

平成二十五年秋、やさか観光協会会長吉村俊廣氏をはじめ中津川市坂下総合事務所地域福祉課安江課長、曾我主査、馬籠脇本陣史料館館長の蜂谷保氏、前坂下町長の山下芳信氏、そして野村欣市氏にお会いし、五郎十郎翁や曾我照代さん、あるいは馬籠や坂下町の当時の状況、景色など様々な事をご教示いただきました。

紙上をお借りし御礼申し上げます。(土井)

【参考資料】

- 「秘話解禁」高村五郎著 昭和四十三年 人間書房
「苗木藩政史研究」後藤時男著 昭和四十三年
「坂下小史」坂下町 平成三年
「坂下新聞」坂下町 昭和二十五年～二十九年
「平成二十五年度顕彰祭パンフレット」